

このひと

日本分析化学会会長に就任される

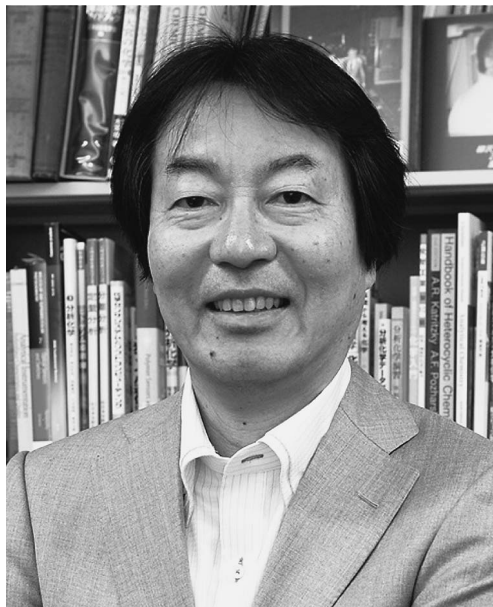
鈴木 孝治 氏

(Koji SUZUKI
慶應義塾大学理工学部応用化学科教授)

1982年慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了。同年4月慶應義塾大学理工学部助手，1998年4月同教授，現在に至る。その間，スイス国立工科大学（ETH）客員教授，神奈川県科学技術アカデミー研究グループリーダー，科学技術振興機構CRESTプログラム研究代表者，日本学術振興会・日本分析機器工業会・内閣府学術会議等の各種委員会委員や委員長を歴任。1997年3月日本化学会学術賞，2005年6月日立環境賞優良賞，2007年9月日本分析化学会学会賞，2009年9月日本分析化学会先端分析技術賞等を受賞。2003/04日本化学会理事，2011/12年度本会副会長，2013/14年度本会理事およびAnal. Sci. 誌編集委員長。

鈴木孝治先生が著名となったご研究として，もっともよく知られているお仕事と私が思うのは，高選択的ニュートラルイオノフォアの開発とイオン電極への応用に関する研究ではないかと思えます。私が大学4年生で鈴木先生のいらっしゃった分析化学研究室に配属された時には，ラリアート型ナトリウムイオノフォア分子の開発と天然物イオノフォア分子の化学修飾による高機能化をやっていた頃でした。鈴木先生はその直後にチューリッヒのETHに客員教授として1年半留学され，帰国後にデカリノ基などの高機能官能基を有するクラウンエーテルを系統的に設計・合成し，リチウム，ナトリウム，アンモニウムイオノフォア，そしてダブルアームドジアザクラウンエーテル誘導体に基づくカルシウム・マグネシウムイオノフォアの開発および実用化に成功されました。これらのイオノフォア研究はその後のオプティカルイオンセンサー，蛍光イメージングプローブ，MRIプローブ，MSプローブ等々，鈴木先生の研究の礎となっています。

学会関係で特に私の印象に残っている鈴木先生のお仕事は，日本分析機器工業会（JAIMA）との関係をつないだ事業です。鈴木先生がまだ助教授の頃，当時支部長であった梅澤喜夫先生（当時東大理）の裏方として尽力され，本会関東支部とJAIMAとの共同事業として分析化学東京シンポジウムを発足させました。その初回は3000名もの参加者を集めて大成功を収めました。このシンポジウムはその後様々に形を変え，現在は英国王立化学会（RSC）とJAIMAのジョイントが実現し，多くの分析化学会会員が出席する国際シンポジウムとして発展し続けており，鈴木先生はこの国際シンポジウムのオーガナイザーの一人として尽力されておられます。また，数年前からは学会の学術活性化ワーキンググループの長として，今後の学会の進むべき方向について様々な会員のご意見を聞きつつ，具体案をまとめ提案されてこ



られました。これが実行に移されると思います。

私の知る鈴木先生は「常に新しいことが好き」です。私が助手の頃，まだパワーポイントプレゼンテーションが普及する前の時代にAstoundというプレゼンソフトをいち早く研究室に導入されました。ちょうどその頃に鈴木先生は日本化学会学術賞を受賞され，プロジェクターを岩手大学まで運んでその受賞講演をプレゼンソフトでされたときには，OHPによる発表が常識であった当時，非常にインパクトのあるご発表をされたことを覚えております。また，今ではカラー画像のデジタル色変換など当たり前に行いますが，ハンディカラーアナライザーの市販品が出た時にもすぐにそれを購入してテーマを立て，得意のオプティカルイオンセンサーを使ったDigital Color Analysisという方法論へ展開され，それがAnalytical Chemistry誌にも掲載されました。

また，鈴木先生は私が学生の頃も含めて，学生に対しては常に思いやりをもって接して下さっております。私が鈴木研の助手になった頃，鈴木先生が学生の教育に対してよくおっしゃっておられたのは「教育は一人一人だから」というお言葉です。毎年研究室には様々な学生が入ってきますが，その気質も年々変わってきています。それでも毎年学生の気質を見極めながら一人一人を的確に指導され，学生個人の成長と研究の進展とを同時に進めておられることが，毎年合宿で行っている学部生の中間報告などで私には強く感じられます。

いま，日本分析化学会の運営は学会始まって以来の逼迫した状態と漏れ聞いております。「平時」とは異なる現状の中，会長職をお引き受けするかどうかの決断に苦しまれたであろうことは想像に難くありません。今後様々な苦渋の決断を迫られる局面も多々やってくるのではないかと推測します。しかし，お引き受けくださった鈴木先生の決断を信じ，それに協力して支えていくことは我々会員全員の責務とも感じます。今後，鈴木先生が牽引する日本分析化学会が現状を乗り越えてさらに発展し，新たな未来を拓いていくことを心より願っております。

〔大阪府立大学大学院工学研究科 久本秀明〕